
我々が民間警察！

テン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らが民間警察！

【Nコード】

N4604X

【作者名】

テン

【あらすじ】

公務員として働く主人公。

でも、ある日突然 『民間警察』へと出向が発令される。戸惑う主人公。

階級が高いわけでもなく、これと言った何かがあると言っわけでもない。なぜ……？

しかも、出向先は悪名高い『？日本民間警察』。

右も左もわからないまま、流され型の主人公は新しい職場へと行く！

え、なんか出向になったんですけど！？（前書き）

初投稿です。

一応、暴力的な表現は後々出てくると思います。

それと世界観の説明を出そうと思っっているのですが、僕の文章能力が拙いのでクドクなること請け合い。

文章能力は低めなのでご注意。

誤字脱字、文の意味がわからない、もつとわかりやすい表現があるよ、などありましたら教えて頂けると幸い。

以上の事をお許しただけの方はよろしくお願いいたします。

注意：亀より遅い更新になるかもしれません。

え、なんか出向になったんですけど!?

1 .

「 は? 」

思わず上司の前にも関わらずそんな声をあげてしまった。

そんな俺に上司は何の表情も変えず、不機嫌そうな顔で一枚の紙を渡す。

「 ……栄転らしい。とりあえず喜んでおけ 」

ポンと肩を叩かれる。

上司の顔にはありありと今回の俺の出向についての不満が見て取れる。

「 あ の、冗談ですよね? 」

自分でもわかる。顔の筋肉が引きつっている。

最後の希望をかけて聞くが、上司は顔をゆっくりと左右にふった。

目の前がグルリ反転し、この小さな会議室がどこまでも広がるような錯覚。

……ああ。どうしてこんな……。

がんばって警察学校を卒業して、これから国家公務員として将来安泰な未来を描いていたのに !

俺の手にはこう書かれた公式な書類が握られている。

『 九条 悟 』 上記の者を『 株式会社 日本民間警察 』へと出向するものとする。

え、なんか出向になったんですけど!?(後書き)

お読みくださり、ありがとうございます!

意外と好待遇？（前書き）

あ、一応、世界観は現代日本がベースではありますが、ちょっと違う世界です。

意外と好待遇？

それからは大変だった。

辞令に伴う仕事の引継ぎ、新しい職場への顔出し、警察の独身寮からの引越し。

なぜか民間警察でありながら殉職率の高い職場での仕事内容は厳しい事も予想されるので、辞めようとも思った。

……が、ただでさえ求人が、仕事がない世の中で、そのせいで犯罪率が上がって警察の手が回らなくなつて民間警察が作られた。

そんな情勢の中で仕事があるだけマシだと、明日の飯にも困る生活は想像さえしたくないから少しだけ頑張ってみようと思う。

仕事なんていつでもやめれるさ。なんて、強がりを中心の中で思いながら。

驚いたのは？日本民間警察 略して『民警』の社員に与えられ

るのは、今までの警察の独身寮からは考えられないほど新しく豪華で広いアパート。

最初は幹部用に借りられたものかと間違えているのでは？ と、会社に問い合わせたほどだ。

そして、新しい職場の上司が小柄の可愛い女性であったこと。正直、好みすぎる。

名前を浅生 綴あおいひ、20代後半と言う話だ（詳しい年齢までは教えてくれなかった）。

俺と同じく、警察からの出向との事。

少しだけ新しい職場に明るい期待を感じた。

……と、言うのも過去の話。

現在、俺は全体的に緑色とか黒とか茶色がまだら模様になった服を着込んでいる。

所謂、迷彩服とか呼ばれるものだ。なぜ？

そして、基礎体力訓練と呼ばれる地獄を3ヶ月ほど経験して、返事になぜか『レンジャー！』とか単体で叫んだり、語尾につけたりしなければならぬ先よりも地獄の部隊に2ヶ月ほどいる。

あれ？　なんで自衛隊に……わからない。

結局、あの綺麗で豪華な大きな部屋で過ごしたのは1週間ぐらい。今は野山の乾いていて寝やすい所が俺の寢床。

天井なんて広くて高くて。

壁なんてない辺り一面が俺の部屋！　文字通りに、だ！

風通しだつて悪くない。ただ、虫が沢山なのと雨が防げない、頻繁に教官が襲ってくるのが難点かな？

あっははははははははあ！

……騙された！　チクシヨウ！

極度の疲労と睡眠不足で妙なハイテンションなのに、体は鉛のように重い。

時折、思考の片隅に浮かぶ『倒れてしまえば』『あの高いところから飛び降りれば』なんて後ろ向きな誘惑に負けそうになる。

その度、教官の叱咤激励という名の罵詈雑言を『やれます』『レンジャー！』と機械的に返す。

……本当に。マジで。俺って警察官じゃなかったっけ？

そう言えば、この会社の歓迎会で、自衛隊からの出向だという人がちらほらいたような気がする。

笑いながら朗らかに交わした冗談みたいな挨拶と、酒に酔わされて気づかなかつたが。

あの時に気がつくべきだつたんだ。

何で民警に自衛隊からの出向された人（と、のたまうヤツが複数）がいるの、とか。

会社の説明の時に支給された装備のものものしさとか。

拳銃以外の殺傷能力の低い、テイザーガンとか熊さえも怯む催涙スプレーとか。

制服が何でか、自衛隊の野戦服を紺色に染めただけで何一つ装飾が変わらない異常性とか。

『拳銃以外、警察よりも装備いいじゃん』なんてはしゃいでいた俺を殺してやりたい。

これならあの犯人確保の時、死ぬほどの思いをしなくても良かったじゃん、なんて阿呆な事を抜かす俺を粉碎してやりたい。

「もう限界か！？ 根性無えのか！！ 股にぶら下がってるのは飾りか！！ やる気が無えなら帰れ！！ 母親の垂れ下がったオツパイでも吸ってる！！」

耳元での怒声にハツと気がつく。目の前には緑色が。青臭い。

……どうやら気を失って倒れていたらしい。

体が鉄になったように硬い。背中の装備が数字以上に重く感じる。

「まだやる気か！？ 落伍しちまえ！！ 貴様みたいな女みたいなヤツはこの部隊には要らん！！」

続けざまにかけられる罵詈雑言に叫び返す。

「まだ出来ますレンジャー！」

会社辞めよう。

辞めてやる。

そんな事を考えながら歩き出す。

……明日はどつちだ。

意外と好待遇？（後書き）

7時から仕事なのに現在4時とか……。
風邪引いてる体に鞭うってどうする気だ、自分よ……。

地獄の先には何がある？（前書き）

超龜更新もうしわけありません……！

それと、なんでだかお気に入りか1件登録されてました……！？

ありがとうございます……！

テンションだだ上がりですよ！

これからもがんばって行きたいと思しますのでヨロシクお願いします！

地獄の先には何がある？

地獄の研修を終え、2日の休暇をもらえた。

全日程を終了した際に、鬼の教官が急に人らしい態度で「電話だ」と没収されていた俺の携帯を手渡したのだ。

泥のように混濁した意識の中、もう遠い時に出会ったような気がする浅生さんがそう告げたのだ。

ああ、終わった。そう思った途端、急に体から力が抜け意識が閉じた。

……けたたましく鳴る電子音にビクリして跳ね起きる。

すわ何事かと、身構えたらそれは俺の携帯の着信コール。

ほつと緊張を解く。……訓練の賜物か、徒手格闘の体勢をとっている自分自身に苦笑しながら。

電話は上司である浅生さんからの『モーニングコール』。

はて？ 今日休日はと、疑問を覚え聞けば、何故だか今日はその出勤日だと言った話だった。

あわてて日付が表示されるデジタル時計を見て愕然とする。 確

かに出勤日。記憶のある日から2日経っている。

……嘘だろ？ マジで？ 寝てたら2日経ってるって、どんなタイムワープ？

入社する時間までは幾分余裕のある時間だけど、せいぜいシャワーを浴び準備をするぐらいが関の山だろう。

……と、言うか。ここは。俺のアパート？ 俺の部屋？

なんでベットに寝てるんだ……？ しかも、スエットに着替えてるし……。

様々な疑問で頭が軽くパニックになる。

……怖え。一番新しい記憶ではあの電話の最中強烈な脱力感に襲われて からの記憶が無い。

無意識に帰ってきたのか？

寝すぎて痛む頭は呆けていて、俺を気にかける浅生さんの甘くも威厳のある声で一気に覚醒する。

「悪いね。あつちで気絶した君を勝手に運んだから。」

それと部屋にも上がらせてもらって、適当に着替えさせてもらったから」

えええ！？

鍵はどうしたんですか、とかの疑問は後回しで俺の脳裏には小柄な浅生さんが俺を負ぶっている姿が思い浮かんだ。

寝ている俺を……？ いやいや、俺だつて成人した男。

そんな俺を担ぐ姿がどうにも想像できない。

友人には体の線が細いとはよく言われる俺であっても体重は70kgぐらいあるんだぞ……？

でも……。あの研修を受けていたら……ありえそう。うわあ、何かシニール。

「あれ、起きてる？ で、また悪いんだけど、達夫達たつおに……ああ、君の先輩達ね、名前覚えてる？

に、頼んだんだけど部屋荒らしてなかったかい？ あいつらはお調子ものだから」

ああ、なるほど。浅生さんのイメージが壊れなくてよかった。

綺麗な眼鏡の似合う知的女性が実はマッチョとか、そんなキャラクター付き合い方がわからない。

パツと部屋を見渡し異常が無い事を伝えると、「あ、私も準備をしなければならぬから。」

遅刻しないように「ブツ、とこちらの返答も聞かず通話が切られた。

……ああ、良かった。

浅生さんのイメージ通りで。

細身の文系マッチョの可愛い上司などという存在との付き合い方なんてわからないからね。

筋肉痛で痛む体を誤魔化し、久しぶりの熱いシャワー。

7ヶ月ぶりのスーツに変な感慨を味わい、アパートの鍵を閉める。
……なんでなんだろうなあ。

訓練中に何度も辞めようと思っていたのに、今ではもう少し頑張ってみようかななんて考えてる。

不思議なもんだ。

やっぱり可愛い上司（浅生さん）の声を朝から聞けたから？

そんなつもりは少しも無いけど、何となく。

新しい生活にワクワクしてる自分がいる。

「いい天気ですね」

歩きながら先輩であり相棒の桑原 達夫さんと巡回をする。

街を見回って犯罪抑止をするお仕事の最中です。

民警での仕事は驚くほど『普通』だった。

担当する地域を巡回し、犯罪の未然予防。

事件があれば急行し、犯人捕獲とか被害拡大防止とか。

公警と違う事は、

- 1．捜査権が無い。
- 2．拳銃所持が許されない（例外を除く）。
- 3．道路交通法違反を初めとする車両関係の犯罪取締りができない（例外あり）。

大雑把に言ってこんな感じ。

あくまでも強盗とか盗難、殺人などの重犯罪を『予防』する事がお仕事らしい。

この『予防』という所がミソで、実際に重犯罪が起こった場合、俺達民警の出番はなくて

全て公警へ丸投げする。

つまり実際には民警は『少しの警察権限を持たされた警備会社』と

差して変わらない。

実際に昔の警備会社がそのまま民警になったものも多々ある。

……なんでこの会社、殉職者がおおいの？　そもそも大事件とか銃刃法に関わる民間警察では手に負えない事件は法律上、出来ないことになっているのに。

民間警察（法）は犯罪未然防止の意味が強いのだ。

とは言え、事件が起きたら急行しなければならぬ。

どんな事件が起きているのかわからないから。

その後で、民警が出張るのか公警が出張るのか決められる。

民警の手に負えなければ、丸々　公警に投げることになる。

……あ、ちなみに。

俺みたいな出向組は管轄する警察署に前もって届けて、受理されれば拳銃を貸してもらえることになっている。

一応は身分上、警察官だから。

でも、1時間毎の連絡と何十枚もある書類を提出しなければならぬいから、そんな面倒な事はしない。

「お前、何ボーっとしてんの？」

考え込んでいたら、先輩であり相棒の桑原　達生さんに声をかけられた。

見た目、170センチ中盤ぐらいの身長のチャライ感じの優男。

髪だつて茶髪で……。これで自衛隊からの出向だと言っただから驚きだ。

本人曰く、『俺、これでも格闘肩章もちだから。脱いたらスゴイよ』との事。

……格闘肩章ってなに？

「ええ。……いや。公警に居た時にこの会社のいやな噂を聞いていたもので。

噂とは全くあてにできないなあ、と」

「……………ああ。アレか。殉職者続出の、とか」
少し考える仕草をして桑原さんは言う。

笑いながら言われたその言葉に『ソレですな』と、素直に返す。

「思ったより良い会社だろ、ウチは」

ははは、と笑う。「ま、その内わかるさ」

意味深に、続けて言われた。

……………なに？ 何か思わせぶりな事言っちゃってんですか。

そんなネタふり勘弁ですよ。

小心者の俺がビビっちゃうじゃないですか。

と、その時。タイミングよく無線から無機質な業務連絡を告げる音が鳴った。

……………え、フラグ立てちゃった？

ビビりまくる俺とは違い、桑原さんは冷静にイヤホンを自らの耳に押さえつける。

俺の耳にも同じように無線機から伸びたイヤホンがあるわけで……………。
これは出勤している全員への通達だった。

『本日、17:00（ひとなまるまる）時、特例B項が発生した模様。以降を持って全職員は会社待機を命じる』

桑原さんをチラリと見れば、ニヤニヤと子トラを未ながら無線機にしつこい位に指をさしている。

『キタキタ』と、口を 声を出さずにパクパクと動かしながら。

何て憎らしい……………！

無線が終ると同時に桑原さんはやたらと良い笑顔で俺の方をバンバンと叩く。

「やったな！ ウチの会社の真髄だぜ！ 配属数日でラッキーだな

！ 殉職すんなよ！」

チクシヨウ。憎しみで人を殺せたら……………！

何だよ、殉職するなって!?

どんな仕事だよ！

この会社は民警だよね？！

「とりあえず、会社もどろぞ」

相変わらず、ニヤニヤとした表情でこちらを見る桑原さん。

殺意さえ覚える。

いくらどんなことをするのか聞いても答えてくれない。

そんな事をしながらも、会社への距離はだんだんと近くなっていた。

地獄の先には物騒な武器を掲げた天使がこちらをにらんでいました。(前書き)

なんと、お気に入り登録が2件になってました！
嬉しすぎて、今回ちょっと早く投稿です！

地獄の先には物騒な武器を掲げた天使がこちらをにらんでいます。

今現在、俺はひとり 目だし帽を被って女の子に話しかけている。目だし帽とは、タイガーマスクとかが被っていきそうなアレ。

アレの何の模様もない真っ黒なやつで、だ。

日の沈んだ真っ暗な公園で、グスグス言いながら背中を丸めて泣いてい座り込んでいる女の子に、だ。

……どう思う？

20歳ぐらいの、全体的にフワフワした服装をしている、しかもなんでかその服があちこちボロボロで、

破けた服の下の素肌はアチコチからの出血が見える。

そんな女の子に声をかける、ミリタリー風の服を着たひとりの覆面の全身真っ黒な男。

……アウトだとは思わないかい？

俺がこの現場を見たら、真っ先に職質&任意同行を言い渡すよ？

実はさつきから背中を気持ちの悪い汗が

流れていて止まらないんだ。

イヤホンからは、俺に執拗に指示が飛んでくる。

『イケイケ行け！ どんどん話しかけるんだ！』と、言う風に具体的にではないものが。

……何でだ、何をだ。とは聞けないのが下っ端の辛いところ。

笑い声で明らかにこの状況を楽しんで飛ばされる指示に殺意さえ覚える。

まあ、桑原さんにはここ数日いつもの事なんだが。

『名前、年齢、住所を聞け』

桑原さんとは別の、落ち着いた声が無線から聞こえる。

この声の人はサブリーダーと呼ばれる役職の、みかがみ観鏡 さといめ悟さん。

リーダーである桑原さんのおかげでいつも苦労している人だ。

『 ついでに3サイズも！』

続けざま、桑原さんの要らない指示も流れてくる。

……マジ、桑原いらねえ。

後はもう1人いるんだが今日はお休み。渡井わたらい 零しずく。基本的には俺と同じ平の下っ端。

俺と同じで、こういう場合には怪しい人物への職質と身柄確保を行う。……ハズ、なんだけどなあ。

休み、なんだって。有給。

2人はどこかに身を隠して、俺のバーディへはどちらもなってくれなかった。

基本的な会社の方針では、4人でチームを作りさらに2人・2人で行動することになっている。

監督・指示、その補助・狙撃で2人。これは通常リーダーと狙撃がうまい人間になる。

下っ端、または格闘・近接戦闘が上手な人間が2人、職質や身柄確保を行う。

と、厳格に決まっているはずなのに……。

ちらりと辺りを見渡しても、2人の姿は見つける事はできなかった。狙撃銃は鉛の玉の代わりにゴムの弾丸が使用され50メートルぐらいの射程しかないはずなのに。

こんな状況へ投げ出されるとは思いもしなかった。

泣いている女の子を見ながら、イヤホンから聞こえる戯言にため息を付く。

この女の子はどう見ても被害者だ。だと言つのに観鏡さんの指示は『職質しろ』。

桑原の戯言はどうでもいい。

一刻も早く救急車を呼ぶべき状況。

なのに、あの観鏡さんがそう指示しないのだ。

そもそもこの任務自体がオカシイんだ。ウチのチームは1人休みだと言つのに補充なし。

現場責任者の浅生さんがそれに何も言わない。他の参加チームも何も言わないし、参加しない。

“ 厳格に” 決まっているハズの事が守られていないのだ。

怪訝に思いながらも、女の子に声をかける。

「大丈夫ですか？ 失礼ですが、お名前とご住所を確認したいのですが」

何度目かわからない質問。今度もダメかと思いたため息が出そうになった瞬間。

女の子が顔を上げる。

狐面を付けていた。細いスリットが目の所にある、白地に髭などを描かれた神社の神楽で使われていそうなソレ。

茶髪のグリグリと巻かれた髪が面をなでる様に風にそよぎ、ミスマツチだった。

背筋が泡立つ。

狐面の女の子はゆっくりりと、実際にはさほど時間はかかっていないだろう、立ち上がる。

背筋を一度伸ばすように空を見上げ、続いてこちらへ顔を向ける。

数秒の間、俺達は互いの目を見詰め合う。

細いスリットの奥の瞳は暗くて見えない。

……この状況は何だ？ 狐面は俺が考える前に動いた。

右手の拳がこちらの顔面を狙う。

体は考えるよりも速く首から上を左へ。

避けた拳からは風を切る音。何て速さだ。

相手の右手に、俺の右手を添え外へ押し出す。左手は相手の伸びきった右手の肘を手前に引く。

気が付けば俺の体はそう動いている。……合気道の技だ。

幼少の頃から仕付けられた、体に教え込まれた動き。

このまま力を加えれば相手の腕は折れる。

体に染み付いた自然な動作。ほぼ反射の域で無意識に、俺の体は動

く。

通常であれば、途中で思考が戻り相手の腕を折ることはない。

一瞬。

狐面の腕が異常なほど重くなり　いつもとは違う形で俺の思考は戻された。

無心で向けていた視界にはその異常な光景が見えた。

クルリ、と。

俺が肘を引いていた手を中心に飛んで、否　回って見せたのだ。公園の鉄棒を回るがごとく。

あつげに取られる時間もなく、一手二手と続けざま狐面は手足でこちらへしかけてくる。

それらをかるうじて受け、流し、かわす。

狐面の動作は速く、その手足が動きたび風を切る音が鳴る。防戦一方。

……だが、幸いにも狐面の動きは単調で読みやすい。これならば。どうにかできるかもしれない。

『九条、援護する。対象を一瞬でもいいから止める』

こちらからどんな手を出すべきか、考えているとイヤホンから声があった。言葉を返す余裕はない。

止める？　一体どうやって。

一手一手の洗練さは感じられないもの、その速さ。意識してから反応したのでは確実にやられる。

隙を見つけて、少しなら手出しをできるかもしれない。

そのぐらいしかないのだ。防御をしながら、伺う。繰り返される手足の伸縮。……ここだ。

隙。狐面の伸びきった腕の関節をとり曲げる。本来曲がらない方向へ。

短い悲鳴。

後ろに跳び下がる狐面。その距離が4メートル近い。……人間の飛べる距離じゃない。

コイツは本当に人間なのか。

狐面は距離を取り、こちらの出方を覗^{うかが}うつもりなのだろう。

『よくやった。撃つぞ』無線に続き、大きな発砲音が夜の公園に余韻を残す。

俺が偶然にも狐面を止める事に成功し、観鏡さんが発砲したのだ。

これで終りだ。いくらゴム弾といえど、体に当たればダメージは大きい。

当たり所によつてはそのまま死に至ることすらもある。無意識に体から力を抜いた、瞬間。

狐面が目の前にいた。

狙撃は　なんで！？　焦りで無意識に腕が出る。よりもよつて俺の体は逃げることを選択しなかったのだ。

相手の顔面を狙つての一撃。

狐面は俺の腰の辺りにある。ダツシュで突っ込んできたのだ。狙撃を避けて。

拳に軽い感触。構えていない体勢では力が入らない。パキ、と何かが碎ける音。

腹部に重い圧力。突っ込んできた狐面がタツクルをしたのだ、そう思いついたときには俺は地面に背から叩きつけられていた。

夜空に浮かぶ真つ青な満月が見えた。

雲は一つも無く、自らの光で他の星達の輝きを消してしまった孤独な月が。

一瞬の間、そんな取り止めのない事を考えていた。

腹から人の温かさを感じ向けば、そこには例の狐面がマウントポジションで座っていた。

俺の腕は完全に狐面の足の下にあり、動かすことはできない。

足で反撃をしかけても無駄だろう。直感でそう思った。

狐面はすでにその顔に無いというのに、顔を見ることは出来なかった。

真上から差す月の光が暗い影を作っている。

……これは詰んでるな。

目だけで周りを見渡せば、鬱蒼とした背の低い木々に囲まれていた。狙撃できるような場所じゃない。

桑原さん、観鏡さんが駆けつけるにための50メートルの距離は遠い。

こちらに来る前に俺は殺されてしまう。

諦めが全身から力を抜かせる。　殺すのなら殺せ。もう、どうでもいい。

実際にはこの狐面が俺を殺すつもりなのかは知らない。

けれど、あれだけやって何もしない事はないだろう。

先ほどの一手、一撃にはこちらを殺す為の威力があった。

……さあ、来い。目をつぶり最後の時を待つ。

よく言う走馬灯は見なかった。

「タイチヨ、コイツなんか諦めた風なんですけど」

耳に、そんな言葉が聞こえた。方向からすれば、腹の上。

狐面の声らしい。しかもその声には聞き覚えがあった。

『はいよ。とりあえず現状待機で』

耳のイヤフォンからは桑原さんからの声。明らかに狐面に対して。

驚いて目を開ければ、狐面は髪に手をかけ取っている所だった。

肩ぐらいまで伸びた、黒い髪。それが月明かりで銀色に輝いている。

「よお、後輩君。女の子の顔を殴るたあ、いい度胸だ」

マウントポジションのまま狐面、今日は有給休暇だと聞かされた渡井 雫さんが俺の頬を軽く叩く。

何を、なんで。渡井さんがここにいる？

頭はグルグルと、状況を知ろうと懸命に考え、思い出そうとする。

そうだ！ 今日は何もかもがおかしかった。

渡井さんが有給をとっているというのに遂行されたオペレーション。それに対して浅生さん、観鏡さんが何も言わない。他のチームの誰

もが何も言わない。

厳格に決められた規則に、現場責任者も（リーダーは別として）サブリーダーも何も言っていないかった。

桑原さんの適当なキャラクターにごまかされて、そこまで深く考えさせられなかった。

「ごめんごめん。待たせた」

ガサガサと木々を抜けた、桑原さんがそう言う。

「も〜遅いですよ。早く撮っちゃってくださいよ〜。この体勢、結構恥ずかしいんですよ〜」

対して渡井さんがコロコロと、笑いながら答える。

状況がわからない。

……どこだ？ この状況を端的に説明してくれそうな人物、観鏡さんは。

「じゃあ……ハイ、チーズ！」

一瞬辺りが眩しく光る。どうやらカメラのフラッシュらしいのだが、暗さに慣れた目にはキツイ。

数秒、何も見えなくなる。

「おっけ〜。渡井、よけていいよ」

「了解です。んじゃあ後輩君、女の子の顔に傷を付けた代償は高いからね〜」

再び、渡井さんは頬を軽く叩き立ち上がる。

そして、「あ」と声を上げ再び座り込む。

「どうした、渡井。 九条の温もりが気に入ったか？」

クツクツと笑う桑原さん。俺は何がなんだかわからない。

「……スカート。中、見えちゃうじゃないですか」

恨めしそうに、やっと見えた渡井さんの表情は拗ねた顔を真っ赤にしたものだった。

地獄の先には物騒な武器を掲げた天使がこちらをにらんでいました。(後書き)

戦闘シーン……むずかしいですね。うまく伝わるでしょうか？

わかりにくかったらゴメンナサイ。

それと、お気に入り登録してくれた方アリガトー！！

テンションあげアゲですよー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604x/>

我らが民間警察！

2011年11月29日03時49分発行